

市原佐都子 / Q キテン

部〈レパートリーの創造〉

ロームシアター京都〈レパートリーの創造〉

ロームシアター



ロームシアター京都〈レパトリー〉の創造

市原佐都子／Q『キティ』

2025年2月17日(月)－24日(月・休)

ロームシアター京都 ノースホール

作・演出

市原佐都子

出演

ソン・スヨン (Creative VaQi)

永山由里恵 (青年団)

バーディ・ウォン・チンヤン (Artocrite Theater)

花本ゆか (はなもとゆか×マツキモエ)

音楽・サウンドデザイン

荒木優光

衣裳

南野詩恵 (お寿司)

上演言語 | 日本語・韓国語・広東語 ※3言語が混在しています。

字幕言語 | 日本語・英語

ROHM Theatre Kyoto Repertory Premiere

Satoko Ichihara／Q KITTY

2025.2.17 (Mon)－24 (Mon・Holiday)

ROHM Theatre Kyoto North Hall

Written and Directed by

Satoko Ichihara

Cast

Sung Soo-yeon (Creative VaQi)

Yurie Nagayama (Seinendan)

Birdy Wong Ching-yan (Artocrite Theater)

Yuka Hanamoto (Yuka Hanamoto × Moe Matsuki)

Music & Sound design

Masamitsu Araki

Costume

Shie Minamino (Osushi)

Languages: Japanese, Korean and Cantonese

*Three languages are mixed.

Surtitles: Japanese and English

主催者挨拶

本日は、ロームシアター京都〈レパトリーの創造〉市原佐都子／Ｑ『キティ』にご来場いただき、誠にありがとうございます。

〈レパトリーの創造〉は、未永く上演される劇場のレパトリー演目を製作することを念頭に、2017年からロームシアター京都が継続しているプロジェクトです。シリーズ第八弾は、国内外から注目を集める劇作家・演出家である市原佐都子に新作を委嘱しました。市原とロームシアター京都の協働は『妖精の問題 デラックス』（2022年初演）につづき2作目です。リクリエーションであった前作に対し、今回は市原が韓国でのフィールド・リサーチを経て書き下ろした新作のプロデュースです。2024年12月に城崎国際アートセンターで約2週間の滞在制作を行い、1月から京都でリクリエーションを行ってまいりました。

タイトルの『キティ』は「かわいい」を象徴するような「こねこ」を意味します。主人公くねこの感じる、家庭や社会のなかの違和感が繊細に大胆不敵に描かれます。社会におけるタブー、家父長制、ジェンダー規範、資本主義における大量消費や消費システムといった、現代社会に生じるさまざまな不条理への問いかけが、市原ならではの手法によって私たちに強烈に突きつけられることでしょう。

日本、韓国、香港の俳優と、京都・関西拠点のスタッフとともに、これまでの市原作品のなかでもスケールの大きな世界観で描かれ、AIによる多言語で展開するめくるめく劇的空間を、どうぞお楽しみください。

最後に、本公演の実現に際してご支援・ご協力賜りました関係各位に感謝を申し上げ、主催者の挨拶といたします。

ロームシアター京都

市原佐都子／Q Satoko Ichihara／Q

今回作品を創作するにあたってはじめて韓国へ性売買についてリサーチに行った。色々な立場や意見から活動している人たちに会い、話を聞いた。当たり前だが完璧な意見や活動など存在しない。そこには大きな対立がある。それぞれの目線から助けなければいけない人のために彼女たちは活動していた。そのどれも、誰かにとって救いになり、誰かにとっては救いにならない。私の作品もそうかもしれない。リサーチしたことを忠実に描くというのではなく、リサーチのなかで偶然に目に入って来たもの——商品としてしか存在できない世界中に蔓延る「キャラクター」、肉屋では「肉」を、性売買の店で「女性達」を照らしている「赤い光」——になにか本質が隠れているような気がして、そこから想像力を膨らまし、またそれらを攪乱していくなかで作品にしていった。戯曲を執筆しながら、主人公の〈ねこ〉という登場人物を複数の俳優で演じるアイディアを思いついたとき、スヨン、由里恵、バーディの三人の女性の顔が浮かんだ。

彼女たちに出会ったのは『私とセーラームーンの地下鉄旅行』(2018年)という作品を韓国で上演したときだ。韓国・日本・香港からアーティストが集まり一つの作品を創作した。

その作品の創作期間中、私たちはお互いのことを朝から晩まで、疲れ果てるまでたくさん話し合った。今回出演しているソン・スヨンさん、永山由里恵さん、バーディ・ウォン・チンさんはそのときに一緒に創作したメンバーだ。様々な影響を与え合っている東アジアの国々で、同じ時代に生まれ育って、同世代の女性アーティストとして活動している彼女たちのことを、自分のどこか一部のように近くに感じていた。はじめは好感のようなものであったが、リハーサルが始まると、〈ねこ〉は彼女たちだったのだ、と確信になった。彼女たちと再び手を取り合い、創作できていることに喜びを感じる。

また今回は衣裳の南野詩恵さんや、サウンドデザイナーの荒木優光さんと協働することにより自分にとって新たな試みができている。主人公〈ねこ〉は物語のなかでどこへ向かっているのかわからない地下鉄に乗る。私もリハーサルしながらどこに向かうかわからない地下鉄に乗っているような気持ちがかしている。

最後に、本日はご来場いただき誠にありがとうございます。

市原佐都子

Satoko Ichihara 市原佐都子



©Bea Borgers

劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督。1988年大阪府生まれ福岡県育ち。桜美林大学にて演劇を学び、2011年よりQ始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。2011年、戯曲『虫』にて第11回AAF戯曲賞受賞。2018年、KYOTO EXPERIMENT 公式プログラムにて『毛美子不毛話』『妖精の問題』を二本立て上演。2019年、初の小説集『マミの天使』を出版。同年『パッコスの信女―ホルスタインの雌』をあいちトリエンナーレにて初演し、同作にて第64回岸田國士戯曲賞を受賞。2021年、ノイマルクト劇場(チューリヒ)と共同制作した『Madama Butterfly』でチューリヒ・シアター・スペクタクル、ミュンヘン・シュピラート演劇祭、ウィーン芸術週間、ロームシアター京都と城崎国際アートセンター(2022年)を巡演。2022年、ロームシアター京都「レパトリーの創造」にて、『妖精の問題 デラックス』を上演。2023年、『弱法師』を世界演劇祭(ドイツ)にて初演。高知・豊岡・東京を巡演後、2024年にフェスティバル・ドードンヌ・ア・パリで上演。

ソン・スヨン (Creative VaQi) Sung Soo-yeon

韓国で活動する俳優兼演劇クリエイター。様々な形式の舞台芸術で作品創作や出演を行う。時代をアーカイビングし、それを伝える体としての俳優の役割を長く探っていて、最近は人間中心の思想を省察する演技に興味を持っている。第52回東亜演劇賞の新人演技賞(2016年)、第55回百想芸術大賞(Baeksang Arts Awards, 2019年)の若手演劇賞を受賞、また第60回東亜演劇賞(2023年)では自ら劇作、演出、出演した『B BE BEE』で作品賞を受賞した。



永山由里恵 (青年団) Yurie Nagayama

俳優。1988年神奈川県生まれ。立教大学現代心理学部映像身体学科卒業後、映画美学校アクターズコースで演技を学ぶ。2016年より平田オリザ氏の主宰する劇団青年団に所属。舞台・映画を中心に活動している。直近の出演作は市原佐都子／Q『バックスの信女―ホルスタインの雌』、スペースノットblank『言葉とシェイクスピアの鳥』、青年団『S高原から』等。Qの過去出演作は『毛美子不毛話』、『地底妖精』など多数。



バーディ・ウォン・チンヤン (Artocrite Theater) Birdy Wong Ching-yan

Artocrite Theater 創設者&芸術監督。香港演藝学院でドラマのファインアーツ学士号(第1級学位)を取得し、舞台俳優、劇作家、演出家としての地位を確立する。2016年、Hong Kong Arts Development Councilの若手アーティスト賞を受賞。2021年には、アジア・カルチュラル・カウンシル(ACC)のニューヨーク・フェローシップに採択される。その他にも、『The Visit』で香港戯曲賞最優秀主演女優賞(悲劇／ドラマ)、『The Truth from Liar』で香港戯曲賞最優秀助演女優賞(コメディ／笑劇)、『Sins』で香港シアターリーブル最優秀脚本賞、『Tête-bêche』で国際演劇評論家協会(IACT)香港センター批評家賞年間最優秀脚本賞、『I am Tree』でIACT香港センター批評家賞年間最優秀演出賞と香港戯曲賞最優秀監督賞(悲劇／ドラマ)を獲得するなど、長年に渡り数多くの賞を受賞している。



花本ゆか (はなもとゆか×マツキモエ) Yuka Hanamoto

広島県出身。3歳からクラシックバレエを習い、その後グラハムテクニックやキャラクターダンスも学ぶ。2004年京都造形芸術大学 映像・舞台芸術学科に入学。2005年～2017年までカンパニー KIKIKIKIKIKIに所属。その他、金粉ショーや、現代美術作家やなぎみわの映像作品にも出演。ダンスシーンに留まらず、劇団ヨーロッパ企画の演劇作品にも多数出演。2008年以降、ダンスユニット「はなもとゆか×マツキモエ」としての活動も続け、現在も定期的に京都で自主公演を行う。

戯曲『キティ』をめぐる覚書

熊倉敬聡

※本稿には一部、作品の内容についての具体的な記述が含まれています。（ロームシアター京都）

市原佐都子／Ｑは、その初期作品以来、とりわけ、いまだ現代の社会、そして演劇界に時には露骨に、時には狡猾かつ淫靡に蔓延している家父長制的論理・構造に対して、女性性、動物性、さらには生命といった〈外部〉を過剰に炸裂させ、あるいは微細に侵入させて、現代人・観客の「常識」を攪拌してきた。

私は、市原の、その〈外部〉を召喚する天賦を、生命科学者であり近年はアーティストでもある郡司ペギオ幸夫にならって「天然知能」と呼んできた。郡司のその名も『天然知能』によると、我々の認知・判断を司る既存の文脈・構造に自動的・機械的に従ってしまう知能が「人工知能」であるのに対し、「天然知能」は、その既存の文脈・構造そのものに無頓着であるかの如く「ツッコミ」を入れ、我々の認知・判断の「常識」を啞然とさせるような〈外部〉を召喚してしまう、そんな知能だ。

市原の「天然知能」は、近作『バックスの信女—ホルスタインの雌』、『Madama Butterfly』、『弱法師』と経るにつれ、各々ギリシャ悲劇、オペラ、文楽といった既存の演劇的形式を換骨奪胎しつつ、人間／動物、

西洋／東洋、男／女、人間／人形といった「人工知能」的論理を、いっそう過激に、いっそうスキャンダラスに、いっそう繊細に、いっそう達人的に、その研ぎ澄まされたヒ首の目にも止まらぬ斬法により斬り裂きまくってきた。見終わった我々観客は、いったいいかように斬られたか気づくこともできぬほど鮮やかに満身創痍のなか、ただ茫然自失して帰途につくしかなかった。

そして、新作『キティ』だ。目の前には、三場からなる戯曲がある。

まず一場は、「肉食／草食」、「人間／動物／植物」といった、またもや人工知能的文脈・構造が槍玉にあげられる。

キャロル・アダムズのフェミニズム／ベジタリアニズム的研究（『肉食という性の政治学』）によると、肉食と父権的文化は近代ヨーロッパにおいて深く通底しているとされるが、それを象徴するかの如く、一夫一婦制の〈パパ〉と〈ママ〉と一人っ子〈ねこ〉という、三人家族の食卓で、〈ママ〉が血まみれになりながら肉を料理し〈パパ〉がそれを食す。が、ある日、肉と思って食べたものが実は大豆ミート（肉≒草）だったと騙され激怒する〈パパ〉を慰め

るべく、母子はあらゆる種類の肉をてんこ盛りにした「芸術的」な料理〈肉ニンゲン〉を供する。なぜか突如として踊り出す〈肉ニンゲン〉は、元々草食である家畜たちの肉でできているがゆえに、自らは「肉」なのに草食。その「肉＝草」という人工知能をショートさせる等式は、ちょうど『フランケンシュタイン』でやはり死肉を盛り込まれて創られた「被造物」が、(ベジタリアンだったとされる)作者のメアリー・シェリー同様、草食であったことを彷彿とさせる。しかも、こともあろうか、〈ねこ〉の「ペット」と思しき、これまたねこ(という想定)の被造物が、ふだんはキャットフード(加工肉!)しか与えられていなかったのに、初めて生肉を食べてスピリチュアルな法悦に浸る、「肉(体)＝精神」という等式により、ダメを押すかのように人工知能的認知をものの見事に攪拌しさる。はたして一場を行き交う者(物?)たちは、「肉」なのか「草」なのか、「人間」なのか「動物」なのか「植物」なのか、はたまた「肉(体)」なのか「精神」なのか、天然知能＝〈外部〉の笑いが、さんざめく。

二場。長じた〈ねこ〉の就職先の会社の「現場」＝リアルが、実はAVの撮影「現場」だった、という話。かつて、社会学者ジャン・ボードリヤール(『シミュラクルとシミュレーション』)は、アメリカという消費社会についてこう語った。「ディズニーランドとは、《実在する》国、《実在する》アメリカすべてが、ディズニーランドなんだということを隠すために、そこにあるのだ。」それに倣えば、AVとは、《実在する》現実すべてが、AVなんだということを隠すた

めに、そこにあるのだ…。

これまたかつて、精神分析のジャック・ラカンが「人間の欲望は〈他者〉l'Autreの欲望である」と宣うた(『エクリ』)。この、書きもののすべてが晦渋で自己韜晦で名高い著者のこの一文もやはり一筋縄ではいかないが、あえて読み砕くところだろう。——「私」が「自分」で抱いていると思っているこの欲望は、実は「私」の欲望ではなく、大文字の〈他者〉の欲望、すなわち社会に潜在するこうした無数の「私」の欲望を無意識から統べ、構造化し、生起する〈他者〉の欲望を反復しなぞっているにすぎない、が、「私」はそれを「自分」の欲望であると錯覚している。「私」は「生身」のパートナーを欲し、性行為を行う。しかし、その欲望は実は「私」の欲望ではなく、AVで判を押すように繰り返される〈他者〉の欲望を反復しなぞり、がそれを「自分」の「リアル」な欲望と錯覚する。まさに、私の欲望はAVの欲望である…。

三場。肉＝草である〈肉ニンゲン〉が肥大し、いつの間にか宇宙にぼっかりと浮かぶ星となる。そのなぜか〈アップル星〉と名づけられた星に、地球上にいる〈ねこ〉と仲間たちは移住を開始する。そして無限に分裂増殖を繰り返し、高速で回転するミラーボールとなって宇宙を覆い尽くさんとする。今や世界のあらゆるところ、あらゆる表面、あらゆる隙間には、〈キティ〉が棲みつき、その真っ黒な目ですべてを見ている…。

この、ありとあらゆるところに〈キティ〉が寄生する世界＝星は、はたして「かわいい」とい

うシミュラークルの純粹細胞が無限に増殖する「ピンク・グローバリゼーション」の千年王国なのか。はたまた、評論家四方田犬彦がその名も『「かわいい」論』で論じた、「かわいい」という「薄膜」が破れて人類を襲う「本質的な破局」、ハルマゲドンなのだろうか。「唯一確実なことは、破局がこれまで回避されてきたのはひとえに『かわいい』という観念の薄膜が、われわれを現実と直面することから隔ててきたからにすぎないからだ。『かわいい』の薄明はすぐそこにまで迫っている。だがその終焉を無視するかのように、『かわいい』はわれわれの想像的空間にあっていっそう権能を誇り、現代社会の神話として眩しげな威光を放っている。」

現代版八百万の神としての〈キティ〉。それ

ははたして人類に福をもたらすのか、禍をもたらすのか。それとも、福と禍が目眩くように旋回し、人工知能と天然知能が刺し違える最後の審判に我々を投じるのだろうか。我々は、この劇場でそれを“体験”するだろう。

ところで、戯曲『キティ』は、舞台上に登場した〈ねこ〉がリンゴを齧り、そのリンゴが上昇するシーンから始まる。そして〈ママ〉が〈ねこ〉のためにせっせと拵える〈ねこ〉の好物の「アップルパイ」。そして最後に〈ねこ〉たちが移住する星が〈アップル星〉。なぜかくも「リンゴ」なのか。そういえば、エデンの園でアダムとイブが齧ったとされる果物もリンゴではなかったか。この、人類に初めて「欲望」をもたらし「原罪」を負わせてしまった果物＝リンゴ。

ドラマトウルク Dramaturg

熊倉敬聡 Takaaki Kumakura

芸術文化観光専門職大学教授。慶應義塾大学教授、京都芸術大学教授を経て現職。パリ第7大学博士課程修了(文学博士)。フランス文学・思想、特に「ステファヌ・マラルメの“経済学”」を研究後、コンテンポラリー・アートやダンスに関する研究・批評・実践等を行う。大学を地域・社会へと開く新しい学び場「三田の家」、社会変革の“道場”こと「Impact Hub Kyoto」などの立ち上げ・運営に携わる。主な著作に『GEIDO論』、『藝術2.0』、『瞑想とギフトエコノミー』、『汎瞑想』、『美学特殊C』、『脱芸術／脱資本主義論』。城崎国際アートセンターのwebサイトに、市原佐都子／Q「Madama Butterfly」、『弱法師』についての論考を寄稿。http://kiac.jp

作・演出	市原佐都子	城崎国際 アートセンター レジデンス協力	蛭田絵里香(芸術文化観光専門職大学) 前川友萌香(芸術文化観光専門職大学)
出演	ソン・スヨン(Creative VaQi) 永山由里恵(青年団) バーディ・ウォン・チンヤン (Artcrite Theater) 花本ゆか(はなもとゆか×マツキモエ)	稽古場通訳協力	(公財)京都市国際交流協会 株式会社office PARK
音楽・ サウンドデザイン	荒木優光	照明アシスタント	木内ひとみ
衣裳	南野詩恵(お寿司)	照明協力	株式会社 流(RYU)
舞台美術	中村友美	録音協力	外 soto、植松幸太
照明	魚森理恵(kehaiworks)	音響機材協力	ヤマハサウンドシステム株式会社 株式会社ヤマハミュージックジャパン
映像	小西小多郎	制作協力	山里真紀子(Q)
音響	土肥昌史*、合田洋祐*		
舞台監督	川村剛史*	ポータル字幕協力	株式会社リアライズ エヴィクサー株式会社
特殊造形製作	株式会社バボット		
演出部	川村智基(餓鬼の断食)、興侶陽乃(ヨ アガキ)、高木沙羅々(芸術文化観光専 門職大学)	[ロームシアター京都スタッフ]	
		舞台	藤本直樹、島村弘之、井上達也
		照明	柴田順、林いづみ
		広報	儀三武桐子、寺田貴美子
		票券	蒼森彩加
ドラマトウルク	熊倉敬聡	プログラムディレクター	小倉由佳子
翻訳(英語)	アヤ・オガワ	企画製作	ロームシアター京都
翻訳・オンライン 通訳(韓国語)／韓国 リサーチコーディネーター	コ・ジュヨン	主催	ロームシアター京都(公益財団法人京 都市音楽芸術文化振興財団)、京都市
翻訳(広東語)	ジャネット・ロ・ミョウ・ミン	協力	城崎国際アートセンター(豊岡市)
稽古場通訳(韓国語)	キム・ヨンヒ、チョン・ソジン、 イ・ヒョジョン、ホン・セヒ	助成	文化庁文化芸術振興費補助金 劇場・音楽堂等機能強化推進事業 (劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)
稽古場通訳(広東語)	ヤウ・ヒュトン、コウ・ウギ		独立行政法人日本芸術文化振興会
著作権法務アドバイザー	野瀬健悟(弁護士・三村小松法律事務所)		
宣伝美術・イラスト	ササキエイコ		
写真(宣伝・記録)	中谷利明		
記録映像	嶋田好孝		
制作	眞鍋隼介、木原里佳*、 垣田みずき*、川原美保*		

*ロームシアター京都



今後の上演予定

東京 | シアターコモンズ'25 2025年 3月1日・2日 @スパイラルホール
主催：シアターコモンズ実行委員会

アフタートーク

2月21日(金)19:00の回終演後

司会・進行

ケイラブ・チェン・チャンノン(Artocrite Theater)

登壇

市原佐都子(Q)

ソン・スヨン(Creative VaQi)

永山由里恵(青年団)

バーディ・ウォン・チンヤン(Artocrite Theater)

感想シェアピクニック

2月22日(土)14:00の回終演後

集合場所: ノースホール ホワイエ

進行

熊倉敬聡(ドラマトゥルク)、高木沙羅々(演出部)

公演関連コラム

ヨンドウンポ

「韓国・永登浦を訪れて…」

文 | 市原佐都子(劇作家・演出家)

市原佐都子とはなにか

①「かわいくて、かわいそうで、こっけい。赤ん坊なわたしたち」

文 | 木村覚(美学者／市原佐都子/Q『妖精の問題 デラックス』ドラマトゥルク)

②「市原佐都子の音楽」

文 | 横堀応彦(ドラマトゥルク、舞台芸術研究者)

ロームシアター京都 WEB マガジン

「Spin-Off」に掲載

<https://rohmtheatrekyoto.jp/spin-off/>



ロームシアター京都 レパトリーの創造

ロームシアター京都が、2017年度から取り組んでいるプログラムです。劇場のレパトリー演目として時代を超えて末永く上演されることを念頭に、公立劇場が主体的に作品製作に取り組みます。また、作品創造のプロセスを通じて、俳優、ドラマトゥルク、制作者等の専門家人材の育成や観客育成のための関連プログラムを企画し、地域における劇場文化をつくることを目指します。

これまで

木ノ下歌舞伎『心中天の網島—2017リクリエーション版—』(初演:2017年10月)

木ノ下歌舞伎『糸井版 摂州合邦辻』(初演:2019年2月)

ジゼル・ヴィエンヌ エティエンヌ・ビドー=レイ『ショールームダミーズ #4』(初演:2020年2月)

ロームシアター京都開館5周年事業 松田正隆作・演出『シーサイドタウン』(初演:2021年1月)

市原佐都子/Q『妖精の問題 デラックス』(初演:2022年1月)

松田正隆 海辺の町 二部作『文化センターの危機』(初演:2023年2月)

高谷史郎(ダムタイプ)『Tangent(タンジェント)』(初演:2024年2月)

<https://rohmtheatrekyoto.jp/reperory/>



ロームシアター京都 レパトリーの創造

市原佐都子/Q『キティ』

2025年2月17日(月)–2月24日(月・休)

17日(月)19:00

18日(火)19:00

19日(水)19:00

20日(木)休演

21日(金)14:00/19:00

22日(土)14:00

23日(日・祝)11:00

24日(月・休)14:00

編集・発行 | ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)

デザイン | ササキエイコ 写真 | P2,P6 中谷利明

発行日 | 2025年2月17日

禁無断転載 ©ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)

都子/Q

※〈レパートリーの創造〉

ROHM Theatre Kyoto Repertory Premiere

Satoko Ichihara/Q
“KITTY”

市原佐
キティ

ロームシアター京都